

〔寶藏〕<sup>五</sup>長持

ふる長持は、なべて母君の器にして、家毎に侍り、われよそながら其始めを見るに、ふかき窓に養る、處女侍れば、またしき友はらからの中より云よりて、納采の禮と、のへる程こそあめれ程につけつ、一さは二さは十棹も、さは、きらをみがきて、其事をはからふ。<sup>略</sup><sub>下</sub>

〔調度歌合〕<sup>六</sup>番 右

ながもち

徒らにあふこなければみしなかもちの恨の種とこそなれ

〔雍州府志<sup>七</sup>土産〕<sup>中</sup> 近世小袖櫃、肴棚、半長持、及真那板等物亦造之、

〔むさしあぶみ〕<sup>上</sup> 其中に此日ごろ重き病を請て、今をかざりとみえし人を、火事に驚き、すべきかたなくて、半長持におし入、かき出し、辻中におろし置たりしに、何者とはえらず盗取、行方なくなりけり、

〔雍州府志<sup>七</sup>土産〕<sup>略</sup><sub>中</sub> 長櫃、唐櫃、戸棚等物悉西堀河三條邊造之、長櫃大者、其底兩所

施、小車輪、著繩而牽之、出入有便、是謂車長持、長持元、謬長櫃者乎、

〔麓の花〕車戸棚

天正より以來、明曆のころまで都鄙ともに車長持と云へるものを家々に備へて、非常の具になしたり、其かたちは下にのするを見てゑるべし、余<sup>美</sup><sub>山崎</sub>とし文政二年四月、ふたらの御山へまうでしをり、古河といへるうまつぎにて、ある家に車長持あり。<sup>略</sup><sub>下</sub>

〔むさしあぶみ〕<sup>上</sup> そのかみ明曆三年ひのとのとり正月の火災の事はき、及び給ふらん。<sup>略</sup><sub>中</sub> はじめ通り町の火は傳馬町に焼きたる數万の貴賤此よしを見て、退あしよしとて、車長持を引つれて、淺草をさしてゆくもの、いく千百とも數えらず、人のなく聲、車の軸音、焼崩る、音に打そへて、さながら百千のいかづちの鳴おつるも、かくやと覺へておひたしともいふばかりなし。<sup>中</sup>